

学習内容と現代社会の実態をリンクさせた探究的授業実践

－ 「三権分立」における展開例 －

大西 弘員 ・ 川口 広美*

I はじめに

これまで、広島大学附属東雲中学校（以下、本校と略記）では、「『グローバル時代をきりひらく資質・能力』を培う教育の創造」というテーマのもと、研究を行ってきた。社会科部では、社会科で育む公民的資質や学力を踏まえ、本校で規定したグローバル時代をきりひらく資質・能力との関係性を示すとともに、東雲社会科が想定するグローバル化する社会の枠組みを示し、それをとらえる社会科の授業づくりに関して、内容面と方法面の双方向で検討を行った。その結果、授業を通して「グローバル時代をきりひらく資質・能力」を育むための視点や方法として、「グローバル時代における社会の見方・考え方」を設定することにした。また、「グローバル時代をきりひらく資質・能力」につながる児童・生徒の主体性・協働性・多様性を育むために、小中社会科7年間でめざす子ども像も設定し、単元や学年間、小中7年間の社会科を通して子どもの学びを豊かにするための手立てを授業デザインとして示した。さらに学習形態の活用に関しても系統的に示した。

それらの授業づくりの内容や方法を踏まえ、「『グローバル時代をきりひらく資質・能力』を育むための学びを豊かにする授業の創造」というテーマのもと、社会科授業の開発・実践を積み重ね、本研究の有効性をより実証的に示していく。これまでの能力ベースで検討してきた社会科授業づくりを、改めて教科教育における「社会科本来の魅力」の観点から見つめ直すことで、義務教育課程で「社会科を学ぶ意義」について考えていく。また、東雲社会科がめざす社会科授業を明確に示し、小中7年間における東雲社会科カリキュラムの構築をめざす。社会科部では、これまで同様、めざす子どもの姿を以下のように設定する。ここでは、社会科授業において学びを豊かにする子どもの姿（狭義）と、社会科授業での学びを豊かに育んだ結果としての子どもの姿（広義）に分けて示す。

- 学習を通して身につけた社会の見方を、日常の社会生活の事象や問題に照らし合わせて考えながら、学習する意味や価値を実感できる子ども（狭義）
- 学習を通して身につけた社会の見方・考え方を総動員し、身近な日常生活の問題や社会問題を考え解決しようとする子ども（広義）

II 子どもの「学びを豊か」にする東雲社会科の「教科本来の魅力」

1 教科教育としての「社会科本来の魅力」や「社会科を学ぶ意義」

社会科は、その名のごとく、私たちが暮らす「社会（民主主義社会）」を学ぶ教科である。戦後、民主主義社会を日本に形成するため、アメリカのバージニアプランをベースに学習指導要領（試案）が構成されたことに由来する。このバージニアプランは、社会科を中心とした「民主主義社会」の一員を育むコアカリキュラムの形態をとっている。そのため、現在でも学習指導要領や社会科では、子どもたちに民主主義社会の一員として公民的資質を育成することを目標として示している。また、社会科は「Social studies」と示すように、地理学や歴史学、経済学などの社会諸科学の成果を踏まえた教科と言える。故に、社会科で習得する教育内容は、社会諸科学の成果につながる知識・概念であり、これを我々が暮らす民主社会を知りわかる上でのスコープ（視点）として活用し、社会の仕組みをとらえたり社会問題について考えたりする手立てとする。さらにそれを基に、様々な社会事象に対して自らの考えを踏まえ価値判断・意思決定したり、未来予想したりすることもできる。

* 広島大学大学院人間社会科学部研究科

Hirokazu ONISHI, Hiromi KAWAGUCHI

Inquiry lesson practice that links learning content with the reality of modern society

-Example of development in "Separation of Powers"-

このように、社会科は社会諸科学の成果をベースに、様々な社会事象を多面的にとらえながら、社会的な課題や問題を主体的に考え、仲間とともに協働的に解決する。この学習過程は、社会科の教科における特性であり、まさしく社会科授業を通してクラスという小さな民主主義社会を形成し、社会の一員としての資質・能力を育むことのできる、最も実践的で効果的な教科と言えよう。

社会科は、子どもが学級という小さな民主主義社会で、社会諸科学の成果をベースに、様々な社会事象を多面的にとらえながら、社会的課題や問題を主体的に考え、仲間とともに協働的に課題解決していく、社会の一員としての資質・能力を育む上で最も実践的で効果的な教科（仮説）。

2 子どもの「学びを豊か」にする東雲社会科本来の魅力

近年のグローバル時代における社会問題は、既存科学の範疇だけで解決できない場合が多い。そのため、これまでトランスサイエンスの観点を踏まえ、様々な立場から子どもに育むべき資質・能力が提言され、それらを効果的に育むための方法的研究が盛んに行われてきた。社会科が地理学や歴史学、経済学などの社会諸科学の成果を踏まえた教科であることを考えると、社会科学という領域の中ではあるが、ある意味トランス的な要素を踏まえた教科（学問）と言える。

内容教科である社会科は、子どもの社会認識を通して公民的資質を育成する教科である。つまり、社会の見方となる一般性のある知識・概念（内容知）の獲得を通して、資質・能力（方法知）を育む。そのため、社会科では「グローバル時代をきりひらく資質・能力」を吟味・検討する上で、児童・生徒の社会認識形成を切り離すことはできない。能力ベースの方法論に特化した研究は、「這い回る社会科」や道徳の範疇に留まる可能性がある。また、グローバル時代における社会問題を解決する上で、子どもたちが将来トランスサイエンス的な見方・考え方による協働的な市民的行動を芽生えさせるためには、まずはその種蒔きとして、義務教育段階での社会科固有の認識や資質・能力を育成しておくことも必要と考える。

そこで社会科部では、子どもの社会認識形成と「グローバル時代をきりひらく資質・能力」の育成をつなぐ手立て（視点・方法）として、「グローバル時代における社会の見方・考え方」を設定した。また、グローバル化する社会の実態をとらえながら、身近な社会への影響をとらえ実感できるように、空間軸を活用しながら「グローバル時代における社会の見方・考え方」を育む手立てを構築した。

子どもの「学びを豊か」にする東雲社会科の授業基盤や授業方途については、以下に詳細を示す。

東雲社会科では、子どもの「学びを豊か」にするために、子どもの社会認識形成と「グローバル時代をきりひらく資質・能力」の育成をつなぐ社会科授業の手立て（視点・方法）として「グローバル時代における社会の見方・考え方」を設定し、各学年で学習する既存社会だけでなく、空間軸を活用することでグローバル化する社会をとらえたり、身近な社会への影響も実感したりできるような授業基盤・授業方途を独自に設定。

Ⅲ 子どもの「学びを豊か」にするための社会科授業基盤

まず、「グローバル時代をきりひらく資質・能力」を育むための、子どもの「学びを豊かにする」社会科授業を開発・実践する上で、これまでの研究成果を基に、以下の内容・方法を基盤として据える。

【授業形態の基本】

・児童・生徒の主体性・協働性・多様性を育むための「教育内容の論理」と「子どもの心理」を結びつける問題解決的な授業づくり。

【対象とする社会の枠組み】

・既存社会の観点からグローバル化する社会構造をとらえグローバル化する社会の枠組みを設定。

【グローバル時代における社会の見方・考え方】

・「グローバル時代をきりひらく資質・能力」を育むために、既存社会の観点から空間軸を活用しながら、グローバル時代における社会の見方・考え方をとらえる必要性。

〔a. グローバル時代における社会の見方〕

- ・既存の小さな社会から民主主義社会の一員としての資質を育み、グローバル時代における社会問題を通して、大きな社会における民主主義のほころびや影響をとらえていくことを可能とする社会諸科学の成果、つまりグローバル時代の社会に必要な知識（理論）や概念（命題）を、子どもたちに形成すべき「グローバル時代における社会の見方」社会科における教育内容として設定。
- ・「グローバル時代における社会の見方」として、社会空間の関連性や人々の関係性を含み込んだ、社会諸科学の成果を基盤とする知識や概念を設定する必要性。

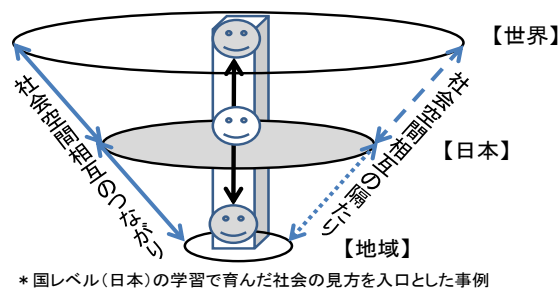
〔b. グローバル時代における社会の考え方〕

- ・グローバル時代の社会問題に対するクラス集団での「協働的な価値判断」と個人での「個の価値判断」を「グローバル時代における社会の考え方」とし、協働的な活動も含めながら個々の思考を活性化させることで、子どもたちの意思決定力の育成や価値感の形成をめざす必要性。

IV 子どもの「学びを豊か」にするための社会科授業方途

1 小中7年間にける系統的な「グローバル時代における社会の見方・考え方」の育成

授業では、子どもの発達段階を考慮し、これまでの校種・学年で学習する学習材や社会空間を入口とし、他の社会空間と関連させて「グローバル時代における社会の見方」を育むことを基本とする(図1・2)。ここでは、より広い範疇の社会空間と比較したり適用したりすることで、問題解決的に学習材を通して獲得した意味内容を社会の見方として獲得する一方(図1・2上方矢印)、先程とは逆向きに学習した空間レベルより身近な社会にも適用していくことで(図1・2下方矢印)、子どもの認識を



* 国レベル(日本)の学習で育んだ社会の見方を入口とした事例

図1 子どもの学びを豊かにするための見方・考え方

広げ深める。

このように、子どもたちは既習内容と関連させたり、自分との関わりを考えたりしながら、「グローバル時代における社会の見方」を獲得し、社会空間相互のつながりや隔たりを踏まえながら、現代の社会状況や課題をとらえ、「グローバル時代における社会の見方・考え方」を育む必要性、さらには社会科を学ぶ意義や意味を実感することができよう(狭義的な意味での「学びを豊かにする子ども」の姿)。

まずは初等段階において、各学年で学習する社会空間を入り口とし、異なる社会空間への活用を通して「グローバル時代における社会の見方」を一つひとつじっくり確実に習得し、意思決定や価値判断といった「グローバル時代における社会の考え方」を育みながら、小中7年間の東雲社会科における「学びを豊か」にする基盤を形成していく。

次に、初等社会科の学習内容を基盤とする中等社会科では、地理・歴史・公民といった分野ごとの学習を通して、これまで初等段階で育んだ様々な「グローバル時代における社会の見方・考え方」を深化・拡大させる。初等段階で獲得した社会の見方を総動員できる場や課題を設定し、どの空間レベルにも対応できる客観的で多面的な社会の見方・考え方の育成をめざす(広義的な意味での「学びを豊かにする子ども」の姿)。こうすることで、初等社会科で育んだ「学びを豊か」なものにしていく(図2)。

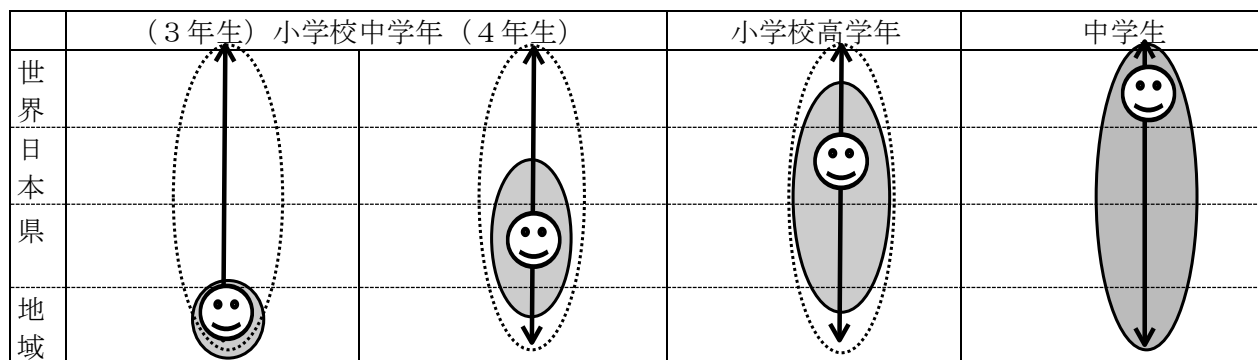


図2 「グローバル時代における社会の見方・考え方」を育むための発達段階に応じた入り口や社会の範疇

2 子どもの「学びを豊か」にするための社会科授業デザイン

ここでは、授業を通して先に示す「グローバル時代における社会の見方・考え方」を育みながら、子どもたちの「グローバル時代をきりひろく資質・能力」を広げ高めていくための具体的な授業づくりの視点や方法について、次に示す(表1)。

ちなみに、表1に示す社会科授業づくりの視点や方法は、デザイン研究の手法を用いており、あくまでも現時点で考えられる社会科授業づくりの視点や方法を暫定的に定めたものである。そのため、今後実践を重ねることで、授業デザインに示す内容は修正・改善していく予定である。

表1 子どもの「学びを豊か」にする社会科授業デザイン

	項目	観点	
教材研究	学習材の開発	<ul style="list-style-type: none"> 子どもの実態(発達段階, 興味・関心)に即した学習材 子どもの既有知識や経験知を活用できる学習材 社会状況, 社会問題や社会変化に関連し, 子どもが社会(教育内容)をとらえやすく追究可能な学習材 子どもの既成概念を揺さぶる驚き・発見・切実性のある学習材 子どもが社会の一員としての意識や自覚を育める学習材 	
	単元構成	課題把握	<p>【グローバル時代における社会の見方・考え方の育成】</p> <ul style="list-style-type: none"> 教育内容としての社会の見方を育む課題 社会のグローバル化やグローバルな社会問題に関連する課題 これまで育んだ社会の見方を総動員して取り組む課題 <p>【グローバル時代をきりひろく資質・能力の育成】</p> <ul style="list-style-type: none"> 子どもが関心をもって学びを追究したり, 活発に意見交流したくなったりする課題(主体性・協働性) 子どもに身近で驚きや切実感を伴う課題(主体性) 子どもが既有知識や経験, 単元を貫く学習課題に至るまでの学習を通して, 課題に気づける内容の設定(主体性) 複数の視点から多面的に迫ることで解決できる課題(多様性・協働性)。
		課題追究・課題解決	<p>【グローバル時代における社会の見方・考え方の育成】</p> <ul style="list-style-type: none"> 学習する社会範疇での課題追究, 課題に対応した社会の見方の獲得 より広い社会範疇での社会の見方の適用 より身近な社会範疇での社会の見方の適用 獲得した社会の見方の有用性・必要性の実感, 価値判断 社会事象や社会問題に対する多面的な見方による追究 これまで獲得した複数の社会の見方を用いた価値判断・意思決定 <p>【グローバル時代をきりひろく資質・能力の育成】</p> <ul style="list-style-type: none"> 子どもの学習材や課題に対する興味・関心を高めたり, 活発な意見交流を促したりすることができる具体物の提示(主体性・協働性) 子どもの様々な意見を喚起し実感が伴う学習活動(主体性・多様性) 様々な学習形態による課題追究活動(多様性・主体性・協働性) 子どもの素朴な考えも含み込んだ弾力的な課題追究(主体性・多様性)
その他	<p>【グローバル時代における見方・考え方の育成】</p> <ul style="list-style-type: none"> 社会範疇(地域・国・世界)相互の関連性についての認識や判断 多面的な見方からの吟味・検討を踏まえた社会事象・問題に対する認識や判断 <p>【グローバル時代をきりひろく資質・能力の育成】</p> <ul style="list-style-type: none"> グローバル時代における社会問題や社会論争問題, 未来社会や持続可能な社会形成に関する話し合い活動(主体性・多様性・協働性) 		

3 子どもの「学びを豊か」にするための学習形態

社会科授業を通して、「子どものグローバル時代をきりひらく資質・能力を育む」には、子どもの社会認識を通じた問題解決的な授業づくり（教材研究・単元構成）が不可欠である。その社会科授業づくりの基本構造の中で、さらに課題追究を通して、子ども同士が互いに学びあう学習活動や学習方法を組み込めば、子どもの主体性・協働性・多様性をより有効に育み、学びを豊かに、広げ深めることになる。

一般的に発達段階が上がれば、子どもの社会認識や客観的・論理的な思考も深まる。

それ故、子ども同士が学びあう活動を取り入れる場合、発達段階に応じた量的・質的な学習形態・学習方法を導入する必要がある（図3）。

しかしながら、学習形態や活動は、あくまでも手段であり目的ではない。有効にグローバルな資質・能力を育むためには、その視点や方法となる「グローバル時代における社会の見方・考え方」の育成や子どもの社会認識形成が不可欠である。

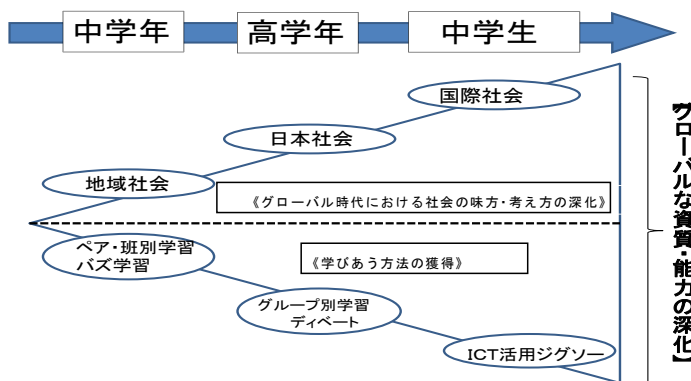


図3 グローバルな資質・能力を育む手立て

V 本年度の研究総括

1 研究の目的

「グローバル時代をきりひらく資質・能力」を育むための学びを豊かにする社会科授業を創造しながら、小学校（中・高学年）及び中学校で学びのつながりの系統性について考察していく。

2 研究の方法

- ・「グローバル時代をきりひらく資質・能力」を育むための社会の見方・考え方や授業づくりのあり方について検討する。
- ・教科教育における社会科本来の魅力，社会科を学ぶ意義，東雲がめざす社会科授業を明確にする。
- ・これまでの「グローバル時代をきりひらく資質・能力」を育む社会科授業の実践をもとに，小学校（中・高学年）から中学校への系統性について考察する。

3 研究の動機

3年生の歴史的分野・公民的分野では、しばしばモンテスキューの「三権分立」が登場する。歴史的分野の取り扱いについては、人類が絶対王政を代表とする専制政治や、産業革命に端を発する貧富の差を経験するなかで、人間一人ひとり「平等」ではないか？と気づき始め、それを定義付けした歴史上の人物としてモンテスキューが登場する。生徒にとっては、日本史中心の学習の途上であり、世界史の内容が入ることから、実際には「知識・理解」の段階でとどまっていることが多く、習得した「知識・理解」を「活用する」までに至るケースは希である。

しかし公民的分野の「政治」の単元においては、学習内容とテレビや新聞といったマスコミからインプットされる情報とリンクしやすいため、学習内容を身近に感じていると思われる生徒が多い。その根拠として、授業中に「教科書や授業では〇〇と定義されているが、実際には□□ではないだろうか？」という意見が飛び交う。特に本年度は、「議院内閣制」を学習した際に、『「内閣と国会は連帯して責任を負う」とあるが、「与党議院が自ら所属している党の党首である内閣総理大臣に対して質問をする姿は、議院内閣制や三権分立の考えが反映されているようには感じない。そもそも与党である自由民主党と公明党が過半数以上の議席を獲得している状況下で、内閣不信任案が可決する可能性は極めて低い。』』という意見が、多くの生徒から出た。「三権」のうち「司法権」については、まだ本格的に学習をしておらず、「最高裁判所長官は内閣総理大臣が任命する」という程度の「知識・理解」ではあったが、本校社会科の前任者である伊達教諭が平成30年度に教育研究会で実践されたモデルをベースに、「あなたの考える三権分立の表を考える」というテーマのもと、研究を進めていった。なお、衆議院議院の議席数は、平成29(2017)年の衆議院議員選挙の結果(総議席数465・自由

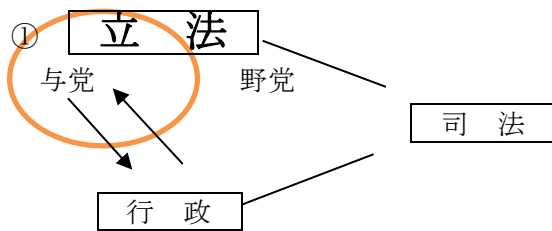
民主党 284 議席・公明党 29 議席) を活用した。

4 生徒の考えた「三権分立の表」の例

「三権分立」の表を作成する際、書き方について以下のような条件を生徒に提示した。

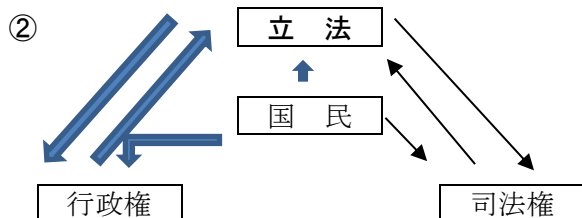
- ・「司法」、「行政」、「立法」の文字の大きさや太さも工夫に含める。
- ・「三権」の位置関係については、三角形にとられず、「上下」や「立体的」に表現しても良い。
- ・「三権分立」、「司法」、「行政」、「立法」以外の「用語」や若干の解説を加えても良い。

このような条件下のもと、生徒はさまざまな工夫を凝らして、「三権分立」の表を作り、その解説や意図も記入させた。

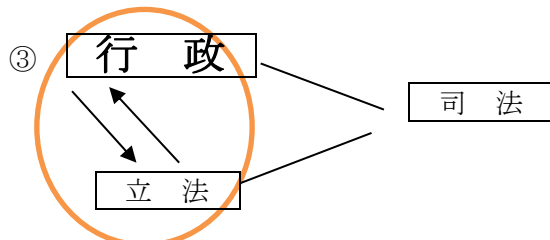


国会議員の中から国务大臣が選ばれるので、「立法」と「行政」は近い関係にある。司法権をつかさどる裁判所は、独立して公平な裁判をおこなうため、少し離れた位置にしている。

立法権のうち、与党の議員は党首が内閣総理大臣のため（自由民主党の場合）、与党と行政権は「親密な関係がある」といえる。

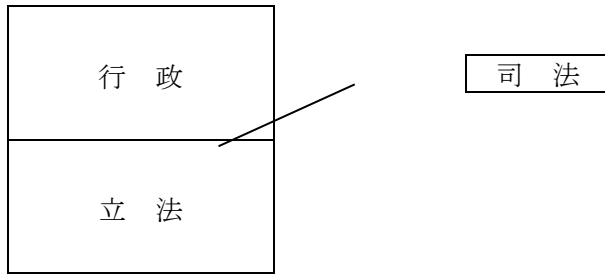


三権の距離感は均一であると思うが、関係性においては行政権と立法権が「密」に感じる。それは、国会議員が行政権と立法権を担当しており、これらの人々は国政選挙と深い関わりがあることから、矢印の太さを太くした。



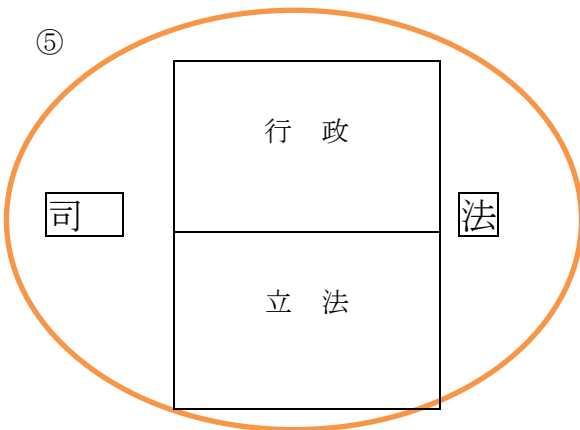
立法権の長は、衆議院議長や参議院議長であるが、内閣総理大臣が「解散」する権利を持っており、この内閣総理大臣が行政権の長でもあるため、二つはとても親密な関係にあるように思ったため、この2つを同じ丸で囲んだ。

④



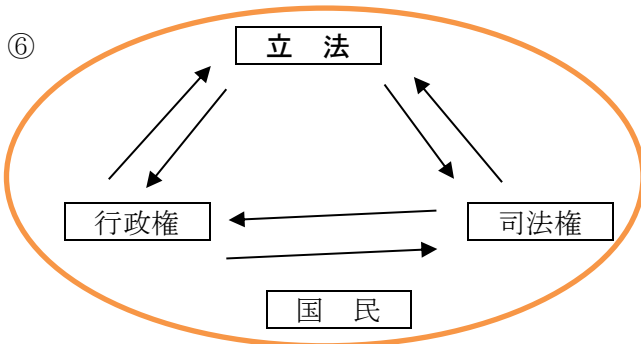
立法も行政も、司法に比べれば仕事内容に近いものを感じた。また、国会議員の中から内閣総理大臣が決まったり、立法権で過半数以上の議席を獲得している与党の自由民主党から内閣総理大臣は選出されているため、この2つは土台が立法、家の部分が行政とした。

⑤



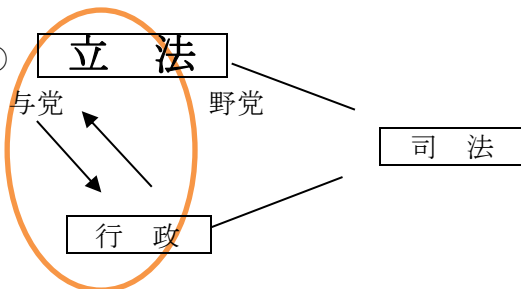
立法権と行政権は同じ政党が担当しているため、距離感が近いと共に、政治に対する主義・主張が同じため、「議院内閣制」は機能しづらいが、独裁政治を防ぐという意味で司法権が壁になっている。検事総長を内閣と関係が近い人物を登用することについては、大きな危険を感じる。

⑥



立法権=国会議員を選出するのも、国民審査で裁判官に目を光らせるのも、すべてにおいて国民が関与し、「世論」というもので国政を動かすことができるため、国民がすべての監視対象という意味で、あえて三角形の外側に置いた。

⑦



立法権と行政権は、与党とつながる部分が多く、対立があまり見られないため、1つのグループに入ると感じた。また三権分立の中の司法権と考えると、違法性を判断・抑制する役割と考えるため、立法権と行政権の親密さは押さえられないと判断した。

5 生徒の考えを踏まえた考察

生徒の意見は大きく分けて①～⑦のパターンに分類できた。ただし、生徒が考えた説明文は十人十色であり、ここで全てを紹介できないのが残念であるが、全体を通して以下のような傾向や、その後の学習への成果が見られた。

- ① 「司法権の独立」を自主的に調べた生徒にとっては、行政権や立法権とは距離があることは当然であると考え、意図的に司法権を政治から切り離したように書いている。
- ② 行政権と立法権を考える時、「衆議院」や「参議院」から「国政選挙」を連想し「国民」と結びつけている生徒は、逆に司法権と「国民」の結びつきが薄いことに少し気がつき始めている。
- ③ 三権分立の表のうち、立法権を与党と野党に分けている生徒は、この学習の意図が理解できているという点で、高評価に値する。
- ④ この学習を終えた後に、「政治参加と選挙」という単元を学習した際に、「参政権のうち、選挙権については立法権と行政権に強い影響力があるため、有権者の年齢層で若者の意見は反映されにくいとしても、選挙に行く必要性がある。」、「投票率が30%台となると、与党の方が有利になり、真の民主政治がおこなわれなくなる。」といった内容にまで踏み込むことができた。特に「三権分立を維持し、議院内閣制を機能させるためには、二大政党制の確立と中選挙区制の実施」と答えた生徒が出てきたことが大きな収穫である。

6 おわりに

本年度、3年生の授業は全体を通じて「深めること」や「意見を交わすこと」が充実していたように感じた。それは昨年度から続けて教科担任をさせてもらい、授業展開を浸透させることができたことが大きいと考える。特に「意見の多様性」や「意見の違いを認め合う・意見の違いがあってもおかしいことではない」という考え方をしっかりと伝えることができた。複数の教員との出会いが生徒の心を育てるという一面も当然あるが、7年間における小学校・中学校の社会科教員が、共通認識をもって授業にあたるということが、来年度以降、より必要であると感じた。

また、本年度は「安倍晋三首相が憲政史上、最長在任期間を更新したこと」や「広島県の衆議院議員や参議院議員に端を発するお金の問題」があったことで、生徒にとっても教員にとっても学習や研究を深めやすくなった要因と考える。来年度以降、時事問題を取り上げるという意味においても、NIE等を織り交ぜながら、生徒にとって充実した授業作りに邁進していきたい。

【参考文献】

- 令和元年度 広島大学附属東雲小学校・中学校 東雲教育研究会実施要項
安彦忠彦, 『コンピテンシー・ベースを超える授業づくりー人格形成を見すえた能力育成をめざしてー』 図書文化, 2014.
- 阿部健一, 「地産地消から知産知消へーつながりという『関係価値』ー」 窪田順平編『モノの越境と地球環境問題』, 昭和堂, 179-211, 2009.
- 阿部健一, 『生物多様性ー子どもたちにどう伝えるか』, 昭和堂, 2012.
- 阿部健一, 「価値を問うー『関係価値』試論」, 立本成文編, 『人間科学としての地球環境学』 京都, 通信社, 41-81, 2013.
- 石井英真, 『今求められる学力と学びとはーコンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影ー』,

大西弘員・川口広美(2020),「学習内容と現代社会の実態をリンクさせた探究的授業実践
ー「三権分立」における展開例ー」, 広島大学附属東雲中学校研究紀要「中学教育第 50 集」, 1-9.

日本標準, 2015.

石井英真, 『小学校発 アクティブ・ラーニングを超える授業ー質の高い学びのヴィジョン「教科する」授業』, 日本標準, 2017.

岩田一彦, 『社会科授業研究の理論』, 明治図書, 1994.

内山節, 『「里」という思想』, 新潮選書, 2005.

内山節, 『内山節のローカリズム原論ー新しい共同体をデザインするー』, 農文協, 2012.

内山節, 『主権はどこにあるかー変革の時代と「我らが世界」の共創』, 農文協, 2014.

木村博一, 「初等社会科教育学の構想」『初等社会科教育学』, 協同出版, 5-14, 2002.

木村博一, 「新しい学びにもとづく社会科授業開発の基礎基本」社会認識教育学会編, 『社会認識教育の構造改革-ニュー・パースペクティブにもとづく授業開発ー』, 明治図書, 144-149, 2006.

木村博一, 「社会の見方や考え方を育てる社会科」日本教科教育学会編, 『今なぜ, 教科教育なのかー教科の本質を踏まえた授業づくりー』, 文溪堂, 43-49, 2015.

新谷和幸, 中丸敏至, 松岡靖, 沖西啓子, 伊藤公一, 木村博一, 永田忠道, 「グローバル社会に対応した国家・社会の構造を認識する社会科授業開発ー附属小学校 3 校の共同研究の成果としてー」, 『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』, 第 42 号, 57-66, 2014.

新谷和幸, 中丸敏至, 伊藤公一, 服部太, 沖西啓子, 木村博一, 永田忠道, 「文化に焦点化した『グローバル社会学習』の授業開発ー附属小学校 3 校の連携を生かしてー」, 『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』, 第 43 号, 153-162, 2015.

新谷和幸, 「グローバル化する社会をとらえ児童に公民的資質を育む授業とは」, 第 64 回全国社会科教育学会全国研究大会課題研究 I (3) 発表資料, 2015.

新谷和幸, 中丸敏至, 伊藤公一, 服部太, 沖西啓子, 木村博一, 永田忠道, 「グローバル化する環境問題に焦点を当てた『グローバル社会学習』の研究ー附属小学校 3 校の連携を生かしてー」, 『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』, 第 44 号, 159-168, 2016.